

第 17 次カンボジアスタディーツアーレポート

武井 昂太

① 第五軍病院

もともとカンボジア国内にエイズ患者はいなかった。しかし、1993年に UNTAC の駐留が始まり、その構成員の一部がエイズ持ち込んだこと、またそれまでタイで生活していた市民が和平と同時にカンボジアに入国するようになったが、その一部がエイズ患者であったことなどからカンボジア国内でもエイズの被害が拡大した。

このような背景からそれまで内戦により負傷した兵士の診療を受け持っていた第五軍病院はエイズ患者の診療という役割を担うこととなった。今現在第五軍病院が診察するエイズ患者数は約 300 人。入院患者は私たちが伺うまで 6 人であったが、訪問した当日に一人の男性がエイズと診断され、計 7 人が入院しながら治療を受けている。

入院患者も通院患者も延命治療薬を摂取しているが、これは WHO の支援によるものだ。この治療薬は程度により複数の種類があり、医師は患者のエイズの進行具合によりそれを使い分けている。

エイズの怖さは感染者の命を脅かすことはもちろんだが、もうひとつ危険性を秘めている。それは家庭・国の経済が衰退してしまうことである。労働者がエイズに感染し、働けなくなるとその労働者が養う家庭の収入が減るため、困窮する。国という単位で考えても、その分だけ、財・サービスの提供が行えなくなる。こういったことからエイズは二重の怖さがあると言える。

しかし、テレビやラジオを通じて、エイズに関する知識を提供してきたため、エイズ患者数は減少を続けている。また病院の利用は無料であるという広報活動をラジオを通じて行い、病院に通いやすい環境を整えている。

今第五軍病院は新たな手術室を増築中であり、さらなるサービスの向上が期待される。

② CMC ポップイ安倍小学校

以前と異なり、舗装された道路を車で進むと、CMC ポップイ安倍小学校についた。そこでは子どもたちが整然と列をなし、私たちを迎えてくれた。さらに CMC ソングを歌って私たちをもてなしてくれた後、授業見学をさせてもらった。授業形態はほぼ日本と同じ。1人の

教師が黒板を使って授業をしていた。ただどの教室でも教材が使われておらず、チョーク一本で授業をする様子に若干の違和感を覚えた。

授業後、新しい制服を手渡すと嬉しそうな笑顔がはじけた。

CMC ポップイ安倍小学校には大きな池がある。雨期の雨水を乾期まで保存するためのため池である。この池は当時の福岡県古賀市立舞の里小学校 5 年生の支援によりつくられた。今回のツアーにはそのうちの一人が大学生となり、参加していた。本来であれば、自分の支援により完成した池を見て満足感に浸るところなのであろうが、実際にはそうではなかったようである。というのも、生徒たちはその茶色く濁った水をそのまま飲んでいるという事実を知ってしまったからだ。

今後も継続的な支援が必要であることを深く認識した学校訪問となった。

③エマージェンシー病院

エマージェンシー病院はもともと内戦被害者の治療のためイタリアの NGO により立ち上げられた。しかしながら、内戦が終わり、地雷被害者数も減少してきたためにその NGO は引き揚げることとなった。

ただ、通院患者、入院患者が急に 0 になるわけではないため、継続的に運営していくことが求められ、ドナーを募ることとなったが、その時半田晴彦さんがドナーを買って出たために現在も継続して治療がおこなえている。

最初に書いたとおり、現在は地雷被害者はさほど多くなく、この病院内には 5 人のみという状況だ。私が訪問した際には子供の地雷被害者がいたが、地雷被害のケースとして、子供が興味本位で地雷に触れ誤爆することが多いようだ。またほかの事例としては、効率よく魚を取ろうとし、川に地雷を投げ込もうとした際に誤爆するケースや収入を得るため地雷を分解しようとした際に誤爆するケースなどがある。

近年では地雷被害よりも交通事故被害が深刻な問題となっている。カンボジアには旧正月(2月)を祝うという習慣があるが、その時期には飲酒運転が増え毎年多くの患者が運び込まれる。今年は 6 週間で 120 人の交通事故被害者が出たそうだ。

エマージェンシー病院にはきれいな庭がある。これは患者さんの精神の安定を図って設置されているのだが、この庭の手入れを地雷被害者に委託し、雇用機会を創出して患者さんに「また働ける」という希望を生み出している。そういった意味で医療という物理的なサポートを行う一方、このような心理的サポートも行き届いている病院だ。

17次スタディーツアー感想文

武井昂太

今回の旅費は23万円。学生の自分にとって決して安くはない金額である。それでもこのツアーに参加することを決めたのは、NGOの活動の一端を垣間見ることができると思ったから、また、「カンボジア＝世界でも有数の貧困国」という自分のイメージが真実なのかそれともそうではないのかはっきりさせたかったからである。

カンボジアについての最初の印象は思っていたよりずっと発展していたということ。整備された道路に、きれいで設備が整ったホテル。そういった意味で私のイメージは誤りであったようである。しかし数日後カンボジアは私にまた違う一面を見せた。それは地面の起伏が激しく、舗装されていない道、ガスや電気が通っていない家々、茶色く濁る水を飲む子供たちなどから感じられた。残念ながら貧困についてはいまだにこの国に根強く残る問題の一つなのだと感じ取れた。

ただツアー中に感じたのはこんな悲観的な思いだけではない。CMCさんの活動の成果をこの目で見て、非常に感激したのだ。

しかしそれと同時に支援していくことの難しさを感じた。それぞれの地域のニーズを把握すること、それに見合った資金を調達すること、そして、これらの活動を継続していくこと、これらは容易なことではない。将来直接的にあるいは間接的に途上国の発展に寄与したいと考える自分にとって、自分の考えているような甘い世界ではないことに挫折感を抱いた。だがこれは「人のためになりたい」と考えるならば誰もが乗り越えなくてはならない壁であろうと思う。その壁にこのタイミングで直面できたことは本当によかったと思う。もっと自分を成長させ、この壁を突破できるところまで自分自身を高められる時間が存分にあるからだ。

そのためにも同じ思いを共有する仲間や先輩方とともに支援を継続していきたい。

時の経過とともにこの10日間のことを忘れ去ってしまいそうで不安だが、「僕」の心を燃やす燃料としてこの経験をずっと心にとどめておきたい、そんな風に思わせる10日間であった。